

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

地域研究の刷新と環インド洋世界研究＜基幹研究：環インド洋地域研究＞

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2023-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三尾, 稔 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00010012

地域研究の刷新と環インド洋世界研究

三尾 稔

グローバル地域研究プログラムの開始

人間文化研究機構（以降、機構と略称）は発足以来拠点ネットワーク型の地域研究を継続してきた。研究の重要性は認識されつつ日本での研究が十分に進展していない地域を設定し、その地域特有の課題探究のための研究拠点を機構と全国の大学や研究機関との協力によって設置し、これらの拠点がネットワークを形成して共同的に研究を行ってきたのである。先の中期中間目標期間では、「北東アジア」「現代中東」「南アジア」の3つの地域研究事業が実施されたが、そのいずれにおいても民博に中心、または副中心拠点が設置され事業の中核的役割を担った。この研究事業はネットワークに参画した大学の協力とプロジェクトを担った多数の研究者の熱意によりさまざまな成果を上げたことは民博通信でも既報の通りである。

一方3つの地域研究事業間の連携は必ずしも十分ではなかった。またグローバル化の急速な進展を踏まえた新しい地域研究の視点や手法の開拓も大きな課題となってきた。そこで今年度から拠点ネットワークによる研究推進という骨格は維持しつつ、地域研究間の連携を強化するとともに、グローバル化の中での新しい地域研究を先導する事業として「グローバル地域研究プログラム」を立ち上げることとなった。

グローバル地域研究プログラムのねらいと体制

政治、経済、社会、文化などさまざまな面でのグローバル化が進む現代世界にあって、既存の「地域」にのみ注目してその基本的性格や構造を解明する研究はもはや成り立たなくなっている。その一方、新たな形でのナショナリズムの高揚や地域の固有性の再創造などの動きも活発化し、これがグローバル化のあり方にも大きな影響を与えるに至っている。またこのような動態のもとでポストコロニアル時代とは異なる空間連関が生じ、従来とは異なる地域性も生じつつある。

従来のグローバル化のとらえ方の前提には、地域の外から市場化、民主化などのグローバル化の諸力が加えられ、地域が従属的にその諸力により変容させられているという暗黙の認識があった。しかし、上述の通りグローバルに連関しあう経済や政治のあり方自体が地域の側から変容させられ、問い直される状況が生まれている。今後の地域研究は、このグローバルと地域の相互の動態的関連性の解明を行う必要がある。グローバル地域研究プログラムは、このような問題意識のも

と、これまでおもにポストコロニアルな世界認識のもとで想像（創造）された各地域の固有性を内在的・本質的に明らかにすることに注力していた地域研究を刷新し、グローバル秩序の構築（とその失敗）と変容のメカニズムを、諸地域の比較と関連性という視点から明らかにすることを主要課題としている。そのうえで、ポストコロニアルな地域像を超える新たな地域研究のあり方を提唱することも目標としている。

この目的を達成するため、「グローバル地中海」「環インド洋」「海域アジア・オセアニア」「東ユーラシア」の4つの地域研究プロジェクトが新たにスタートし、それぞれがネットワーク型の地域研究を推進している。さらに、地域研究プロジェクト間の相互連携を強化するため、「グローバル地域研究プログラム」総括班が設置され、共通テーマに基づくシンポジウムの企画、部門間連携研究事業の推進を通じて、グローバルと地域の相互連関の動態の解明にあたっている。また、公募制の特別研究班を構成して総括班の下におき、新しい地域像の構想に取り組もうとしている。

今号ではそれぞれの地域研究プロジェクトのねらいを紹介している。以下の残されたスペースで、そのうちの「環インド洋地域研究」プロジェクトの全体構想と民博拠点のねらいを簡単に述べておく。

環インド洋地域研究の全体構想

このプロジェクトが中心的に対象とする地理的空間は、陸域としてはアフリカ東岸から中東南部、インド亜大陸、東南アジア西部を含み、それらをつなぐインド洋海域とそこに点在する島しょ部である。この地域は、温帯域とは異なる生存基盤の上に、イスラーム、インド型宗教、西欧近代という3つの文明圏が絡み合って発展してきた。古代以来のヒト、モノ、価値の交流はその経路を変えつつも依然として活発であり、現代世界の経済を牽引するに至っている。同時にこの地域は、中国やインドといった新たな地域大国も主要なプレーヤーとして加わり、現代国際政治のホットスポットの1つともなっている。この地域の長期にわたる持続と変動を視野に入れつつ、「自然環境」も、ヒトも、モノも含むさまざまなアクターの動態をとらえ、この地域の人びとが資源循環型生産様式や多様な価値観の共存といった知恵をどのように生み、何を「良きもの」として求め、何に希望を見いだして生きてきたのか。また今後生きてゆこうとしているのかを学際

三尾 稔（みお みのる）

国立民族学博物館グローバル現象研究部教授。専門は文化人類学、南アジア地域研究。共編著書に『現代インド6 環流する文化と宗教』（東京大学出版会 2015年）、*The Dynamics of Conflict and Peace in Contemporary South Asia: The State, Democracy and Social Movements* (Routledge 2021)、編著書に『南アジアの新しい波』（上・下巻）（昭和堂 2022年）などがある。



海はつねにヒト・モノ・価値の環流の基盤となってきた。（2020年、モザンビーク島、森田智彦撮影）

的に解明することが、本プロジェクトの主目標である。ヒト・モノ・価値の流動は地理的圏域を越えて活発に展開してきたことはこの地理的空間でも同様である。それゆえ、この空間の境域を閉じたものにとらえず、常に透過性が高い多孔質なものとして研究を進めることは言うまでもない。

本プロジェクトには、中心拠点となる民博のほかに、東京大学、大阪大学、京都大学がネットワーク拠点として参加している。これらは拠点独自の研究目標のもとに現地調査や研究会を実施する一方、プロジェクト全体が主催する国際シンポジウム、拠点間合同研究会、若手研究者セミナーの共同開催などを通じて連携的な研究も行う。このうち、全体シンポジウムでは2023年1月に民博が幹事拠点となって環インド洋世界の環流動態をテーマとしたキックオフシンポジウムを開催する。国際シンポジウムの成果は英文論文集としてシリーズ化して出版することを計画している。

研究の国際連携の面では、第3期の「南アジア地域研究」で民博拠点が主導して開始した Asian Consortium of South Asian Studies を継承し東アジア・東南アジア諸国の研究機関との連携を続ける一方、世界各地に設立されつつある環インド洋世界研究のためのセンターを結ぶコンソーシアムの立ち上げも構想している。

環インド洋地域研究民博拠点の研究

民博拠点は中心拠点として環インド洋地域研究プロジェクトを主導する一方、「移動の関連性と連続性」を拠点独自のテーマとし、環インド洋世界を形成・持続・変容させてきたヒ

ト・モノ・情報・カネ・文化の移動そのものと、それらの移動がもたらす多様な位相（社会、文化、個人）における変容に着目し、それらが相互にどのように作用し、それが何を育んできたのかという関連性と、移動の時空間的な連続性の解明を過去2000年単位の時間幅を対象に行う。具体的には以下の問題に取り組むことを目標としている。すなわち①環インド洋域内、およびここを起点とするヒト・モノ・情報・カネの移動に関する実態解明、②文化に関する「環流」概念の精緻化と応用可能性の追求、③移動先、移動元におけるヒト・モノ・情報・カネ・文化の移動が生み出す差別・区別・同化の実態解明の3点である。以上のテーマを通じ、地理的空間としての環インド洋地域内部、またそこを越えて広がっていく動態を総合的にとらえ、グローバル地域研究の対象としての環インド洋世界研究の基盤を築くことが本拠点の大きな目標である。上記の2023年1月に開催するプロジェクト全体の国際シンポジウムもこの目標と密接に関連しているため、拠点メンバーが多数参加して研究発表を行う予定である。

拠点のメンバーには民博の教員のほか、テーマを共有する国内の歴史学・文化人類学・建築学などの専門研究者が参加している。既に現地調査や研究会を繰り返し実施しているが、今後は研究協力者を増員して研究体制を充実させる一方、拠点独自の国際セミナーを開催するなど研究の国際化も図ってゆく計画である。研究の成果は参加メンバー各自が論文や著書として発表することはもちろん、プロジェクト全体の成果として拠点独自の論文集の出版を計画している。



ヒンドゥー教徒が建立したスーフィー聖者廟。思想や宗教実践の転移や融合の動態も大きな研究課題である。（2018年、インド・ラージャスターン州カパーサン、筆者撮影）